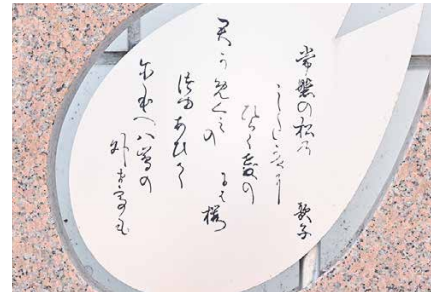


下田歌子記念女性総合研究所

News letter



Contents

02 Column 01
所長挨拶

生活科学部生活文化学科 教授 高橋 桂子

03 Column 02
新収古筆切のことなど

文学部教授・文芸資料研究所 専任研究員 上野 英子

04 下田歌子ヒストリア③

人間社会学部人間社会学科 教授 広井 多鶴子

06 Column 03
第5回 実践の現代史・ナラティブ

茂木 コウ

08 実践女子大学 下田歌子記念女性総合研究所
研究員・今年度の活動

生活科学部生活文化学科 教授 高橋 桂子

今年度より、実践女子大学下田歌子記念女性総合研究所の所長を拝命しました生活文化学科の高橋桂子でございます。専門は家庭経営学、生活経済学や女性労働論です。本学では、専門科目として「家庭経営学」、「生活経済論」や「生活経済論演習」を、共通科目として「ライフデザイン」や「数学的思考」を担当しております。研究では、大学生を対象とした金融リテラシーの測定、父親の家事参加が大学生のキャリア形成や幼児の非認知能力に与える影響などに取り組んでいます。どうぞ、よろしくお願ひ申し上げます。

今年度より新たに始めた試みの1つが、兼務研究員による月1回の「勉強会」です。同じキャンパスにいても学科が違えばお互いにどのような研究をしているのか、実は知らないことが多いものです。コロナ禍の2年間でZOOMの利用が浸透しました。キャンパス間を移動する必要なく、「調整さん」や「伝助」といった調整ソフトを利用して日時が決定したら、すぐに「勉強会」が開催できます。1回につき2名が、それぞれ30分程度、取り組んでいる研究内容について報告します。学ぶことが多い「勉強会」です。ここから、次なる研究のシーズを発見したり、新たな研究者間ネットワークがうまれることを期待しています。

学祖下田歌子先生のご関心は、本当に多方面にわたります。『新撰家政学』では「家庭経済」に関する記述がありますが、そこでは既に債券に関する記述があります。また、園芸も重要な嗜みの1つとらえていたようです。これは実現には至らなかったものの、『女子農芸学校設立趣旨』（大正5年）や『女子農芸学校施設目論見書』（大正5年）があることを本学奥島氏からご教示いただきました。大正11年の『実践女学校設立主意書』には、「特に英国の教育界には女子の園芸が非常に行われ」という一文も拝見できます。野菜や植物や植物を育てることは、家庭菜園の基礎を学ぶという実践的な学びだけでなく、土に触れて野菜を育てる過程で、実は、自分自身と向き合っている、といわれます。この静かな時間を持つことが大事なのです。ここから下

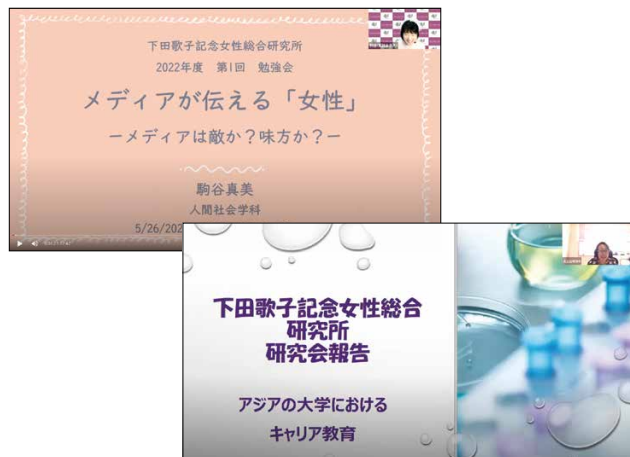
田歌子先生は、主体的に生きるとは、例え全面的な賛同を得られない場合でも、自分が大事だと思ったことは、己を信じて邁進する行動力、そして常に内省（リフレクション）する態度を保持する、タフで謙虚な女性の育成を目指されていたのだと思います。



これからの時代を生きていく現大学生たちが備えるべき資質・能力は、literacy から competency へ、competency から capability へ、そして capability から agency へと概念が深化しています。予測不可能なVUCAの時代を生き抜くことができる強く、しなやかで逞しく、そして他者と適度な距離感を保ち、自分の意見を発言することができる女性へと成長できるよう、支援してまいります。同時に、他人の判断・評価を鵜呑みにして他者を評価することなく、自分なりの見方で、他者には見せない苦悩、迷いや血の滲む努力といったことにも思いを馳せることができる思慮深く、感性溢れる女性に成長できるよう、サポートしてまいります。

スタッフ一同、本研究所の更なる発展を目指して取り組んで参ります。

引き続き、ご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。



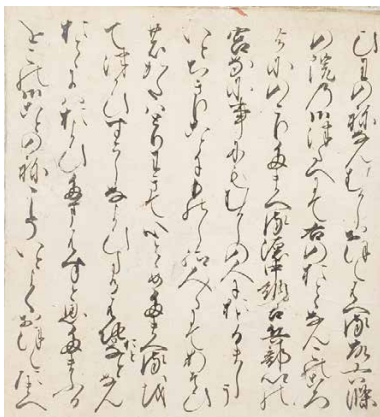
第1回勉強会(2022年) 報告者: 駒谷真美、細江容子(兼務研究員)

新収古筆切のことなど

文学部 教授・文芸資料研究所 専任研究員 上野 英子

私は渋谷キャンパスにある文芸資料研究所に所属し、主に源氏物語の享受史研究を専門としておりますが、最近ネットオークションから、ある「古筆切」を入手することが出来ました。とても嬉しかったので、御紹介させていただきたいと思います。画像はこちらです。

もとは冊子だったものを1葉だけ切り離したものです。折角の写本を、どうしてわざわざ切断したのかといえば、安土桃山時代頃より、古筆愛好者の増加と茶道の流行とが相まって、このような古筆切が大流行したからです。おそらくこの切も、何らかの事情で、もとの冊子が傷んでしまい、古筆切に仕立て直されたのでしょう。



そこで本題に戻って、この古筆切、内容は『源氏物語』紅梅卷の一部分でした。紅梅卷は、故柏木の弟君（紅梅大納言）一家の様子を語る巻ですが、ここに記されたのは、紅梅大納言が妻（真木柱）の連れ子である姫君（宮の御方、父は故蛭兵部卿宮）に向かって、琵琶を奏でよう勧めているくだりです。古筆鑑定家（神田道伴）の極札が添付されており、それによれば、書写者は室町時代の公卿、三條西公条（1497～1563）とあります。

三條西家は室町後期を代表する古典学の家で、源氏物語研究に於いても、実隆・公条・実枝と三代にわたり大きな足跡を残しました。今回、伝承筆者とされた公条も、幼少時より和漢の古典籍を学び、長じては実隆の源氏講釈を代行、45歳時には実隆最晩年の手沢本の書写にも協力していました。この時の写本が現在〈三條西家の青表紙証本〉として日本大学総合学術センターに所蔵されています。「証本」というのは、最も信頼の置ける本文という意味です。作成当初は物語54帖に「奥入」（定家の注釈書）1冊が付いていたようです

が、現在は夕霧巻・紅梅巻・奥入の3帖を欠き、うち紅梅巻のみ、公条筆13行書きの写本で補充されています。

そこでこの切を日大本の公条筆諸帖と比較してみたところ、筆跡は公条で間違いありませんでした。なお日大本は10行書き（後補の紅梅巻のみ13行書き）ですが、この切は9行書きになっており、1行不足しています。でも寸法を比較すると、この切の幅が2.3糎ほど短いので、もともとは10行書きだったものが、何らかの理由で1行分切り取られたものと判断しました。

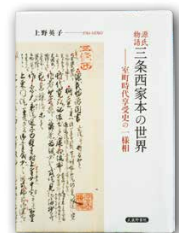
物語本文も、13行本には一箇所のみ本行とは別筆で本文訂正が加えられているのですが、そこを除くと本文に異同は全く無く、漢字平仮名表記はもとより、仮名字母の使い方に至るまでよく似ています。つまりこの切は、散逸した日大本紅梅巻の断簡だった可能性が高いということです。

但しごく僅かですが、もう一つ別の可能性もあります。それは実隆ではなく、公条自身の手沢本の断簡かというものです。公条もまた、彼自身の手沢本（10行書き）を作成していました。『実隆公記』によれば、公条手沢本の元になったのは、伏見宮家本（散逸）だったようです。現状では最終判断は下せませんが、いずれにせよ、行方知れずになっていた巻が、こうして出現してくれたのです。今回は1葉だけでしたが、今後はきっと他の葉も出てきて、もう少しはっきりしたことが判ってくるのではないのでしょうか。

古人の遺墨の跡を眺めながら、三條西家の書写作業にぼんやり想いを馳せております。



上野英子先生のご著書『源氏物語三條西家本の世界—室町時代享受史の一様相』（武蔵野書院、令和元年10月）は「第27回（2次15回）関根賞」（令和2年度）を受賞しました。関根賞は平安時代の文学作品を専門とする女性研究者の優れた著作に贈られる賞です。





下田歌子ヒストリア ③

これまであまり触れられることがなかった下田歌子とその周辺に関する歴史秘話(エピソード)をお伝えします。
そこには知られざる「人間・下田歌子」の姿があります。

「今の女」と「古い女」

人間社会学部人間社会学科 教授

広井 多鶴子

磯村春子—女性ジャーナリストの草分け

「職業婦人」という言葉が使われるようになった大正時代、ジャーナリストとして活躍した女性に磯村春子(1877-1918)がいる。1986年に放映されたNHKの朝のテレビ小説「はね駒」のモデルになった人物である。磯村は、宮城女学校と日本女子大学校、女子英学塾(津田塾)で英語を学び、7人の子どもを子育てながら『報知新聞』などで新聞記者をした。東洋大学学長を務めた社会学者の磯村英一はその息子である。

女性史研究者の江刺昭子は、「草分けの女性ジャーナリスト 新聞記者たち」を描いた『女のくせに』(インパクト出版会、1997)の中で、「私は、新聞記者として働いている間は、いつもは女性ではあるけれども、弱き女なることを忘れて居る」「職務の前に、男女の別は争いたくない」という磯村の言葉を紹介している。磯村は得意の英語を使って、物おじすることなく外国の要人に取材をしたという。



磯村と長男英一、長女俊子。1908年ころ。

磯村はまた、下田歌子をはじめ、様々な職種や立場にある女性にインタビューをし、それを「今の女」と題して『報知新聞』に連載した。下田のインタビュー記事は「古い女の完成」



1918年に41歳で亡くなる直前の写真、このころは、大和新聞記者。

というタイトルで、1913(大正2)年4月19、20、21日の3回にわたって掲載され、同年に出された磯村の著書『今の女』に収録された(復刻版、雄山閣出版、1984)。

『下田歌子先生伝』の「古い女の完成を」

磯村の「古い女の完成」は、1943(昭和18)年に故下田校長先生伝記編纂所が出した『下田歌子先生伝』にも、「古い女の完成を」と題して掲載されている(458-459頁)。だが、実は、『先生伝』の記述は、磯村の記事とはかなり異なる。

どう違うのか。下田は、磯村の『今の女』の中で次のように述べている(154-160頁。下線は引用者)。

私の方針としては今日もやはり明治の方針を継続して参るつもりです。然し、今日の日本は鎖国時代の日本ではなく、各国と均等の交際をして行くにはやはり世界の大勢を知り又これに就いて研究すべき必要があります。

一方、『先生伝』では、「私の教育方針は、やはり現在の国情もよくよく参酌しては観ますけれど、古い明治の真精神を継続して、しっかりと大地を踏みしめた、着実質実な方針で進んでゆきたいと思ひます」と書かれている。『先生伝』は下田の「明治の方針」ということばを「古い明治の真精神」に変え、「世界の

大勢」を知る必要性を説いた下田の言葉を削除したのである。

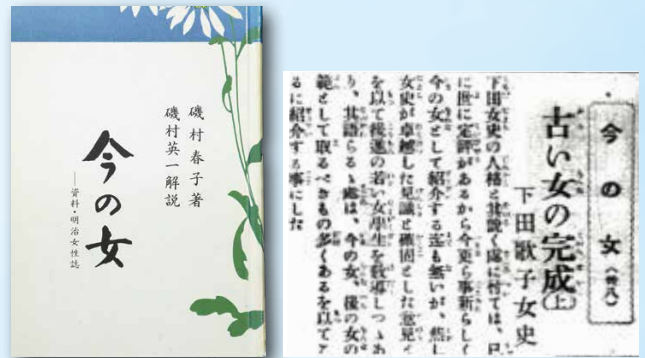
それどころか、『先生伝』は、「徒らに西欧の派手な風俗や思想にかぶれ」とか、「借りものの西洋思想ほど、この世に危険なものはない」などと、西欧思想に触れること自体を批判する文を勝手に挿入している。下田は西欧の方針を採用するかどうかは別問題としながらも、「世界の大勢」を知る必要性や西欧女性の有能さを繰り返し指摘したのだが。

『先生伝』はまた、「目下の急務として、所謂『新しい女』を作る前に、『古い女』を完全なものに作りあげるのが、本当の教育だと信じます」と書いている。だが、元は、「目下の急務としては新しい女を作る前に先ず古い女の完全なものを作り上げないのでは必ず失敗に終わる事がある」という文章であり、かなりニュアンスが異なる。磯村のこのインタビュー記事は、3分の1が下田の日常生活に関することで、確固とした教育方針を語るような文ではないのだが、『先生伝』はそれを下田の教育方針の宣言文に変えてしまったのである。

「今の女」から「古い女」へ

『先生伝』のこの書き換えは、かなり罪深いのではないかと思う。評論家の紀田順一郎は、『明治の群像 9 明治のおんな』（三一書房、1969）の中で、下田を「権力の片棒を担ぐ保守思想家」として描き出しているが、その重要な根拠の一つとなっているのが『先生伝』の「古い女の完成を」である。

『実践女子学園 100 年史』（2001 年）も、『先生伝』の記述をそのまま現代語に直して載せている。しかも、『100 年史』は、『先生伝』が創作した文書もとに、



左:『今の女—資料・明治女性誌』書影
(磯村春子著・磯村英一解説、雄山閣1984。本学図書館蔵)
右:『古い女の完成』『報知新聞』1913(大正2)年4月19日。

「この確固とした信念こそ、まことに女子教育界第一人者としての面目であり、婦人思想の支柱となったのである」などと記した (151-152 頁)。

しかし、本のタイトルが示すように、磯村春子は下田を「古い女」として捉えていたわけではない。それどころか、磯村は、下田のことは今さら「今の女」として紹介するまでもないと述べ、下田は「卓越した見識と確固とした意見とを以て後進の若い女学生を教導しつつあり、其の語らるゝ処は、今の女、後の女の範として取るべきものが多くある」と書いている。磯村は、下田を「今の女」の代表であり、「今の女」や「後の女」の模範として位置づけていたのである。

『先生伝』は膨大な資料に基づく立派な評伝だが、「顕彰的基調が強い」(上沼八郎『伝記叢書 66 下田歌子先生伝』大空社、1989)。『先生伝』が出されたのはいよいよ排外主義とナショナリズムが強まった戦争末期の1943(昭和18)年。そうした時代における下田の「顕彰」が、「今の女」の代表であったはずの下田を、戦後、「古い女」の代表に変えてしまったのではないかと思えてならない。



1908年9月26日、三越呉服店で撮影。
後列左端が磯村春子。
米国大西洋艦隊来航に先立ち、
夫人や娘たちが来日し、三越で接待した。
磯村は報知新聞記者として取材同行した。

第5回

実践の現代史 ナラティブ



interview

もぎ こう
茂木 コウ氏

戦後の実践の歩みを知るために、本研究所では卒業生や教職員に聞き取りを行っております。題して「実践の現代史・ナラティブ（語り）」。

卒業生や教職員の体験を伺うことで、実践の過去と今をつないでいきたいと思っております。

「ナラティブ」の第5回目は、約50年にわたり、大学、短期大学図書館に勤務され、事務長（部長）として、現在の図書館の基礎を作られた茂木コウさんです。第3回目、第4回目は、コロナ禍の状況でしたので、直接のインタビューは叶いませんでしたが、今回は、インタビュー形式により、お話を伺うことができました。実践で過ごした約50年の中で、当時の大学や図書館の雰囲気、学生の様子など、また、現在の私達へいただいたメッセージを中心にをご紹介します。（所長 高橋 桂子）

茂木 コウ氏 プロフィール

1949(昭和24)年9月～2000(平成12)年3月学園本部、大学図書館、短期大学図書館に勤務
2000(平成12)年3月、定年退職後、
2000(平成12)年5月～2002(平成14)年3月香雪記念資料館臨時職員として勤務

▶実践に就職された時の経緯をお教えてください。

私は、群馬県の田舎で育ち、ちょうど高等科2年生の時に終戦を迎えました。進路はいろいろと迷いましたが、県立利根農林学校女子部に進み、2年間勉強しました。その後、家事見習いを経て、姉を頼って上京し、就職口を探していました。そんな時に、職業安定所の紹介で、実践女子学園で求人があるから行ってみたいかと紹介され、急いで面接に行きました。面接といっても簡単なもので、すぐに採用が決まりました。当時は、都市部の空襲を避けるための疎開等で、都市部はとにかく人材が足りなかったんですね。私も両親はすでに亡くなっていましたし、兄や姉に迷惑はかけられないと思いましたから、実践女子学園で働かせていただくことにしました。私は運が良かったんだと思います。私が実践に入職したときには、ちょうど専門学校から新制大学に変わるタイミングでした。そこで、図書館で人手が足りないからと図書館に配属されました。新制大学として文部省の認可をいただくためには、図書館にかなりの蔵書があることが不可欠だったので、私は毎日、購入した本の登録や、寄贈図書を受け入れる仕事でかなり忙しかったのを覚えています。当時の図書館のスタッフは私を含めて、3人でした。翌年に1人採用されて4人になりましたが、今考えると4人で、よくあれだけの仕事をこなしたなあと思います。戦災で本がほとんど焼失してしまったこともあり、購入図

書だけでは足りないの、先生方のご自宅から本を運んで来て、寄贈図書として、図書館に本を受け入れることも多かったです。文部省の視察が間近だったので、毎日必死で奔走していました。

また、それ以外にも私はそろばんが得意だったので、図書館の経理的な仕事はすべて任されていました。

▶どうして図書館司書を目指したのですか？

私は農林学校（2年間）を卒業して就職したので、大学の受験資格を得るため、実践女子高等学校の定時制課程の授業を受けました。そして、大学受験の資格を取った後、國學院大學文学部史学科の2部（当時の夜間学部）を受験し、合格しました。実践の図書館で勤務を終えた後すぐに、目の前の國學院大學の授業を受けに行きました。当時は、國學院大學の先生が実践の授業を担当されることも多く、その逆もありました。あの頃は、毎日仕事と大学の授業を受けることで忙しかったけれど、充実した毎日でした。お陰様で、総代で卒業することが出来ました。桑田忠親教授に卒論指導をしていただきましたが、桑田先生からは、私の卒論について、「茂木さんはもう少し頑張ったら、更に良い論文が書けましたね。」というお言葉をいただき、当時は自分なりに頑張ったのだけれど、もう少し頑張れたかもしれないと少し悔いが残っています。それでも授業への出席率は誰にも負けないくらい良かったと思います。

また、昭和 29 年に東洋大学で図書館司書の講習を受けて、司書資格を取得しました。ですから、他の方のように司書になりたくて、司書の資格を取ったわけではなく、偶然、配属先が図書館だったので、司書の資格を取得しました。まさかあれから約 50 年もの間、図書館でお世話になるとは夢にも思いませんでした。

▶勤務されていたころの図書館の雰囲気と学生の様子はどうでしたか。

学長が守随憲治先生、図書館長は三谷榮一先生のころでした。守随先生には、図書館の件で良く相談に乗っていただきました。学生用の図書は学生の要望などを聞きながら我々職員が選書して購入しましたが、今の貴重書庫にあるような貴重書や、専門書、高価な図書については、三谷館長が選書しました。まさに現在の図書館の原型を作ったとも言えるかもしれません。他の女子大と比べても蔵書の数がかなり多いと思います。今、これだけの本を集めるのは難しいかもしれませんね。

その後、渋谷から日野教養部（当時は 1、2 年生は日野、3、4 年生は渋谷という時代でした。）の図書館に異動するときは、正直なところ、日野に異動しなくなかったのですが、三谷先生が日野キャンパスの図書館は私に任せるとおっしゃってくださったこともあり、三谷先生に信頼していただいているのだからと気持ちを切り替えて、頑張って蔵書を増やしていきました。その時もスタッフは 3 人でした。

日野に異動してきたころの図書館の事務室は西日が当たる部屋でした。この部屋では、仕事がしにくいので、守随学長に直接ご相談をして、図書館内の閲覧室を区切って、事務室を作っていただきました。西日の当たる部屋は、図書館職員の控室にしました。

当時は、大学側も事務職員の意見を取り入れてくれる雰囲気がありました。

私は実践に育てられたと言えます。実践は、自分を見離さない、だから私も実践のために力を尽くすんだという気持ちが芽生えた気がします。

▶図書館司書時代、印象に残っているエピソードは何でしょうか。

私は実践に勤務しているころ着物をたくさん誂えましたが、それは、学生さんの結婚式に招待されることが多く、同じ着物は着ていけないとその都度作った着



物なんです。それだけ学生さんと図書館職員との距離が近かったんですね。当時は、学生からもいろいろな相談がありました。先生方とお話するよりも話しやすかったんでしょうね。相談に乗っていた学生さんと保護者の方から、卒業時に大きな花束をいただいたことは、今でも記憶に残る思い出ですね。昔の教養部は楽しかったですよ。学生さんも初めて一人暮らしを始めて、あの頃の日野は、自分の実家辺りよりも暗く、静かだったので、寂しくなる人もいたんですね。一人で寂しいから、図書館に行って私と話をしようと思ったのだと思います。たくさん学生さんが話をしに来てくれました。あの頃、図書館は居心地が良かったんでしょうね。

▶学生へのメッセージをお願いします。

何か一つ、自分の目標や夢を見つけて、それに打ち込んで、全力で頑張ってください。

今しかできないことが必ずあると思います。そして、諦めなければ、必ず道は開けると思います。

▶これからの実践に期待することはありますか。

あの当時は、時代的なこともあったでしょうけれど、大学と教職員と学生が一体となって頑張っている雰囲気がありました。新しいものを取り入れつつ、そんな実践の良い伝統はこれからも継承して行ってほしいと思います。これからの実践の発展を願っています。

聞き手：高橋 桂子 所長

久保 貴子 専任研究員

高橋 渉 研究推進室担当部長

奥島 尚樹 大学図書館参事

金田ひろみ 研究所事務課課長

久住 律子 研究所事務課

日 時：2022 年 5 月 24 日（火）14：00～15：30

場 所：日野キャンパス 本館 2 階

下田歌子記念女性総合研究所

2022
年度

実践女子大学 下田歌子記念女性総合研究所研究員

(各研究員・50音順)

高橋 桂子 (所長・生活文化学科 教授)	細江 容子 (兼務研究員・生活文化学科 教授)
久保 貴子 (専任研究員・専任講師)	松田 純子 (兼務研究員・生活文化学科 教授)
大川 知子 (兼務研究員・生活環境学科 教授)	村上まどか (兼務研究員・英文学科 教授)
織田 涼子 (兼務研究員・美学美術史学科 准教授)	愛甲 晴美 (客員研究員・福生市郷土資料室)
駒谷 真美 (兼務研究員・人間社会学科 教授)	神木まなみ (客員研究員)
志渡岡理恵 (兼務研究員・英文学科 教授)	牛腸ヒロミ (客員研究員・実践女子大学 名誉教授)
須賀由紀子 (兼務研究員・現代生活学科 教授)	小林 修 (客員研究員・短期大学部 名誉教授)
清田 夏代 (兼務研究員・大学教職センター 教授)	鈴木 隆一 (客員研究員・実践女子学園岩村親善大使)
広井多鶴子 (兼務研究員・人間社会学科 教授)	関 登美子 (客員研究員・実践女子大学 非常勤講師)
深澤 晶久 (兼務研究員・国文学科 教授)	若森 慶隆 (客員研究員・NPO法人いわむら一斎塾)

今年度の活動

■ 研究所「年報」第9号の発行 (2023年3月)

実践女子学園の教職員であれば、どなたでも投稿できます。

申込締め切り：2022年 7月 29日 (金)

原稿締め切り：2022年 10月 28日 (金)

■ 常磐祭

渋谷キャンパス 2022年 10月 8日 (土)、9日 (日)

生田流箏曲部とのコラボで下田歌子作詞箏曲の初めての演奏会

日野キャンパス 2022年 11月 12日 (土)、13日 (日)

生田流箏曲部とのコラボで下田歌子作詞箏曲の初めての演奏会
学園資料の展示ほか

■ 「第20回 下田歌子賞」表彰式 (協力事業)

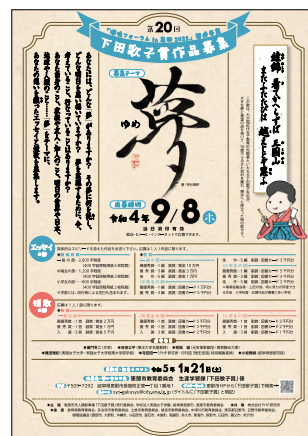
2023年 1月 21日 (土)

岐阜県恵那市岩村町

※詳細は、本研究所 HP でお知らせいたします。

変更になる場合もございますので、随時御確認ください。

<https://www.jissen.ac.jp/shimoda/index.html>



下田歌子賞表彰式

日程：2023年 1月 21日 (土)

今年度で20回目を迎えた下田歌子賞 (テーマ「夢」) 表彰式にて特別展示を行います。

『ニューズレター』 No. 19

発行：2022年 7月 29日 編集・発行所：実践女子大学 下田歌子記念女性総合研究所

〒191-8510 東京都日野市大坂上 4-1-1 電話・FAX：042-585-8945 E-mail：shimoda-ins@jissen.ac.jp